

論説

情報システム

山本 毅[†]

1. はじめに

情報システム研究会は、昭和59年度から発足して、まだ2年目の若い研究会である。また、過去に関連のあるいは類似の研究会は、本学会にはなかったといっ
てよい。当然、この分野をどう定義するか、そこでどのような問題をとらえ、どう発展させていくかが重要となる。ここに推薦した根岸毅氏の論文は、通常の情報処理学会の論文とはその形式においても、議論の範囲においても異なっているが、情報システム研究の一つの主要分野にかかわる論文とわれわれは考えている。以下、まず情報システムの定義、情報システム研究会の目的を述べ、根岸氏の論文の意義を論じたい。

ここで「われわれ」とは、情報システム研究連絡会(主査・浦昭二教授)のことを指す。同会は、発足一年以上前から浦教授をかこむ提案者有志の集まりにはじまって、メンバに入れ替わりはあるものの、現在もほとんど毎月会合している。そこでは、情報システムの定義から、研究会で取り上げるべき論点、各回の研究会の反省、関連分野の動きなどが話題となる。時には激論になり、あるいは連絡会場の閉鎖時間まで議論することもまれではない。この文は、このような研究連絡会での討論に多くを負っているが、文責は山本にある。

2. 情報システムの定義と情報システム研究会の目的

「情報システム」という言葉は、種々の意味で使われているが、ここでの意味は、

●企業、官庁、個人の家庭、あるいは国際的組織など、さまざまな組織体での日常業務処理・意志決定あるいは情報サービスのために用いられている種々のハードウェア、ソフトウェアとその運用機構を、これにいろいろな立場で関係する人間や組織を含めて、情

報の生産・流通・利用にかかわる一連の過程としてとらえたもの

といえる。

その具体例は数多いが、

●OA(オフィス・オートメーション)システム、経営情報システム、意志決定支援システム

●CAD(計算機支援設計)、CAE(計算機支援エンジニアリング)、FA(ファクトリ・オートメーション)システムなど、生産に関するシステム

●自動測定システム、LA(実験室オートメーション)システムなど、研究を支援するシステム

●POS(販売時点情報管理)システム、自動倉庫システム、運送業VANなど、物流にともなう情報システム

●金融機関内の業務システム(利用者向け端末を含む)、業界内・業種間あるいは国際的な会社間決済システムなど

●交通機関、催し物などに関する各種のチケット予約・問合わせ・販売システム

●個人あるいは法人に関する信用情報システム

●他のシステムの機密保護・保全・監査などのシステム

●オンライン文献情報サービス、特許情報サービス、市況情報サービスなど、いわゆるデータベースサービス

●図書館・美術館・博物館などのネットワークシステム、いわゆるオンライン出版や電子図書館など

●学校、家庭あるいは企業で用いられる各種の教育システム

●趣味、娯楽のためのシステム

●家事援助のためのシステム

●病者・障害者介助のためのシステム

などがあげられよう。

これらの例から見られるように、情報システムの範囲は広く、その分類も難しい。「情報システムとは、情報処理システムの全部を含むのではないか。それで

[†] 図書館情報大学
情報システム研究連絡委員会幹事

は、情報システム研究会とは、情報処理学会の上部機構になるのではないかと、研究会発足のとき、何人かの人々から発せられた疑問である。しかしわれわれは、単に既成のシステムの技術的な面を研究するのではなく、つぎのような目標に焦点をあてて行こうとしている。

- ある個人あるいは組織体（たとえば企業、官公庁、学校、家庭、同好会、企業間グループ、業界団体、あるいは国際的組織など）が情報システムを設計・構築・導入・維持あるいは利用するにあたっての問題点の把握、これらの問題解決のために必要な概念および理論の形成、方法論の確立

- 情報システムと個人、組織および社会との相互の影響（情報システムを構築あるいは維持する側への影響、利用する側への影響、あるいは利用しない側への影響を含め、またポジティブな影響、ネガティブな影響の両者を含めて）の研究、問題点の把握および対策の研究

このための研究分野としては、

- 組織内部での情報に対する必要性の分析とその明確化

- 組織のための情報システムの解析および全体設計

- 組織内部での情報および（その基礎となる）データの管理

- 組織内部、および一般社会における情報システムの有効な利用法

- 情報システムおよび（その基礎となる）情報技術と、個人・組織体・社会の関係

- 個人・組織および社会の生活を向上させる情報システムの構築法
などがある。

3. 本論文の意義

根岸氏の論文は、上のような情報システムの中でも、とくに病気・障害をもつ個人の生活向上のためのシステムについて、その在り方に一つの問題を提起したものといえる。個人の痛烈な体験に端を発し、技術の応用による一応の問題解決法、これを一般化した考察、積極的な提案などを含んでいる。最近我が国でも障害者や病人の介助のためのシステムの研究・開発が増加しているが、まだ十分というには程遠い。本論文は、今後、社会学者や人文学者を含めた広い情報処理コミュニティを形成し、このような問題を考えてゆくための出発点の一つを与える論文として、意義あるものとする。

4. おわりに

情報システム研究会は、上のように遠大な目標を掲げ、連絡会メンバーの予想を上回る多数の会員の方々の参加を得て発足した。これらの目標を国際的にみれば、IFIPのTC8 (Information Systems), TC9 (Relationship Between Computers and Society) などの対象とするところと一致している。しかし、研究はまだ十分深まったとはいえず、研究会の方向にも模索が続いている。

とはいえ近年、情報システムの社会における普及・浸透はめざましく、情報処理技術と人間や組織の界面は拡大する一方である。実際の経験と新しい技術の進歩をふまえて、広く高い見地から現実に応じた研究を行う必要は明らかである。初心を忘れず、研究の一層の深化をめざしたいと考えている。研究会会員および一般会員諸兄弟姉のご参加とご協力をお願いしたい。

(昭和60年7月1日受付)